

夥集合ば徳兵衛夫婦は一清に對て厚く謝を演一封の
 筮儀を措て起いづかくて徳兵衛は家に歸母に一清
 が兆の説を語る母も一向不會せず一清軒殿の易
 術は百斷百中とは聲言せども只此は不占得なり先闔
 門にて試説見んに長兒の伽羅羅院は虫も殺さぬ誠實
 もの汝達夫婦の孝敬厚きはこの老が肉眼になど、絮
 語うち早午の貝吹比にもなりて例の寒熱去來りして
 徳兵衛と一時に遍身毒虫に噛るゝがごとく痛疼きて
 悶苦むこと常に倍せり徳兵衛が妻の阿茂は種々介
 抱して在しがやをらツト起て柳眉朝天眼血點て罵
 やう余を誰とかおもふ伽羅羅院なるぞよ我痴にして
 只一途に孝養の爲にと双親の遺體なる性命を代なし
 知ぬこと、はいひながら悪人の大逆に荷擔し精忠至
 善の賢者をば我故に冤の難に苦めたりその業孽輪轉
 すがごとく報來て死ては泥梨の地獄に墮劍山水池の
 刑はさらにて無量の苛責に苦むぞよや舍弟いざ我

に替りて疾那賢者の冤を雪せよさあらば罪障頓に消
 滅し冥府の苦患を解脱せんコハ悲しはや火の車に載
 て往はあら熱や耐がたやと叫も敢ずお茂は度と仰倒
 にたをれて半响不省人事ざりけり母子は毒氣の和時
 にてこの舉動を看又その饒舌を聞て且驚且悲今
 こそ一清軒が説ところ露ばかりも違はざれば共に渠
 が明斷の灼然なるを感じ天明を待かね使を馳て一清
 軒を請じけるに一清軒轎に坐て入來れば徳兵衛は禮
 禮しく出迎て草庵に請じ席に額を突てうち長妻お
 茂が死靈の附語を青天白日に告大人の明斷と符合
 せしはよも凡人には在さじと昨日の不敬を謝つゝ小
 人母子が邪祟をだに禳除給ひなば時日を移さず賢
 人様の雪冤を議候はんと懇懇に請ければ一清は徳
 兵衛が誠心を好してこれを允がひやをら種々の粗豆
 を排へ燧火を點させて壇に登りふかく丹款を凝し泰
 山府君の法をぞ修したりける前よりすてに大熱發り

遍身はや痛疼出んとせし例刻なるに不思議や那の禮
 法の奇特あらはれ徳兵衛母子が靈毒立候に退散して
 苦痛はその餘波も揚ずなりて心神爽こと日比に優
 りて覺ける骨肉のものはさらなり座に在かぎりは翠
 合て雀躍ことかぎりなし老母一清に對てその勢を謝
 し今迄は不介意侍りしが兒子伽羅羅院といへる修験
 土御門様より西國方陰陽師查の役を蒙り俄に召れて
 帝都に上り候しが一別弗に音耗を聞侍らず貴客は
 土御門家の御差使と承はりはれば豚兒と一般御
 任なり定てその事知召れん若は大人の御推舉にやあ
 らんずらん昨日娘が附語に豚兒は黄泉客となりし
 と聞より老はたゞ不小可おもひ亂て侍るにといと干
 關係に問かけられ一清軒殆訝り陰陽師等の査差
 は下官その惣裁判の蒙れば大八洲内これに干て知ぬ
 といふことなし令郎の名さへ今が承り初なるにそ
 は可恠ことなれと半响沈吟せしが掌を礎とうちて

呀原來卦の兆なるめり令郎いかに篤實の質なりと
 も人の爲に欺負れて罪做せられしも計られずといま
 だ語も果ざるに稠人廣座より誰かはしらず大人の御
 語につきて思ひ得せし事の候頃山口の御館には
 什麼の御糺明か一個の修験者を責殺し給ふ由適問て
 の風説をうけたまはりきと道出せりかゝる時の習と
 て古怪の叟がされば這家の伽羅羅院殿平生の口吹に
 己は命薄にて斯貧寒過活ば母を安樂に養ふこと遂は
 ずあはれ今世に大金を損して命を買んといふ人もあ
 れがし一員の舍弟持たれば母を看顧に事を欠ず我は
 命を縮めても親に不自由がさせとむなしと謂られた
 りと骨だつ肩を登してのゝしるに又ある農戸が伽
 羅羅殿は前日出村茶屋にて生ぬ醫者殿と座久對話せ
 られ一包の金子をも拿歸られたるがそれより見かけ
 ぬぞあやしけれと店小二がつぶやきたりと居丈高に
 なりて云さわぐ母は適問よりこの種々の言説を聞て

韓と胸ふさがり餘の悲さに涙さへ出もやらす齒の透を漏聲のいと澁枯てさらばその責殺されたる優婆塞は極て豚兒の伽羅羅院ならん母を養なはんとの健氣なる誠心もいかに孝行なればとて命を活といふやうなる事があるものかとは知らずして中々に珍膳美食も兒の肉見るも可惡聞も否今の歎に比へては錦の褥も鉞の筵これが安樂どころかや殘喘なるこの母も刹那に趕つくぞよ情なき長兒がこゝろや孝行かへつて不孝となりしぞ宜にも門を出しとさなにとなくその後影の透て物哀に想ひしはかゝる愛目を看ん識かおもへば想へば慘酷やと展轉て泣悶く徳兵衛夫妻も共泪とりすがりて母親を介抱種々と慰め賑ゆれば流石老人の例後果にも志淺からず徐々涕を飲て一清軒が膝方に蹴りより既死者は悔みて回らずや徳兵衛汝も亡魂に托語たる悪人ばらの隠謀を顯し賢人様とやらんの冤を雪しまゐらせよ亡兒が爲には

これに優る供養はあらじいざ早く冥府の苦患を助やり又眼底なる仇をも報いたしなにと一清大人爾せんには何如にして可んその風狀になるべきことを次兒めになほ委く訓へて給はれと只願たのむに一清はこれをしてうけがひ又互卦などを併せ考へ徳兵衛を近づけ先方位は道里より東方にあたりて程近き大都會と見ゆれば極てこれ山口なりさあれば早く山口の檢斷所に出訴をなして令郎の命を活れたる縁山を上京對手の檢査を願はれば必勝利うたがひなしその所以は山風盡といふ卦は内卦は風外卦は山なり往古周の代に秦伯といへる諸侯ありその國の東に隣る晋といふ國を討んとて筮してこの卦を得たり秦伯これ見て盡は思しき兆なれば今度の軍はまづ止んと議せられしを易者曰やう吉也時今秋なれば西より東に之に利し外卦の山に内卦の西風吹中てその山の枯葉を吹散す象なれば極めて御勝利あるべしと斷ぜしかば

秦伯これに同意して晋を討て大に克を得られたるその例もあれば今足下の對手どらるべきは十分猛烈なる大敵なれどもその運數漸盡たり且山口府は道里より東の方なり殊に今秋の末なれば西風山の凋葉を吹掃すがごとく速かに玉成べし如あれど其間に不意驚駭に奏巧ことあらん不妨きことなりそはた勿怪の僥倖となりその事よりして令兄の屈死の緣故も明白賢人は雪冤て世に出られて足下もまたその人の庇に由好造化に遇るべしかならず疑はるゝこと勿れとぞいへりける

第十八回〔狩〕

雲は龍に従がひ風は虎に従がふとて明君と賢臣と一時に奇遇ること世に希有例なり大内介滿興朝臣はその初猛烈の君なりしが一回駒澤の諷諫を容ひさせ給しより遂に武文兼備の名將とはなりたまひけりさ

れば駒澤に學び得られたる政要ども已に所行れて分國の軍民總てその御仁澤に浴ることは知召れ猶且は渠に授りつる兵法の機變を試みんと俄に仰出されて三田尻の奥なる猛虎嶺の裾野に射獵を催させたまふ當日は介殿まだ夜深きに館を起行ありて御頭に飄花の裏箱の笠子を戴れ猩々緋に蜀錦の玉縁したる陣外套を穿け背の小服には數の猓矢を納あざらしの行際を着月毛の駒に跨り一手に繁藤の弓を拿せられて多聞樓の下に半响立せたまひて前面を屹と眺望したまへば侍衛の人々はさらなり陪從の土太夫次叙に准て歴々と綺羅星宿のごとく踰踞たるが軍馬とみに些の聲响をさへ做さずいと森々と嚴肅りたる狀は洵にこれ紀律の中度なるに由りとおぼゆ駒澤は希代の軍師なりと暗々稱奇在してそのまゝ腰なる軍配扇を抽とり御額に懸し給ふこの太骨の消金の扇に朱の日輪を抽たるに恰好東の天よりさし登つゝうち匂へ

る嫩紅の影と相映て目も綵なるまで暉々ぞ見えたり這は改観と看るものあり或は好奇こと做したまふよと冷語ものもありて一軍總て恠み駭かぬものもなかりける大内介殿はやをら手綱かいくり徐々騎歩給ひけるに猛虎嶺の山脚まで三里餘の路上を宛も武者押のごとく隊伍整々として聊も亂れ間斷といふことなしかくて設の御假屋に入せられて霎時御慰息あらせられぬ登時午影戴笠あればはや御晝飯喫しめさるらんと隨駕なる長臣輩は台座の光景を規奉つるに殿は將几に坐れながら御手自佩糧とて小々やかなる漆包を披かせられたるが只焼飯に香漬と乾肉梅とのみなり殿はこれを甜美と喫させ給ひ一杯の馬柄杓の水を飲せられてはてたるを見より人々呆れまどひ且慚且怖て齋せ來れる行厨は美味を悉せしことなれば君前に出すとかなはず個々たゞ空腹を抱て躊躇居るに殿は最恠しと思し汝等什麼故に午飯を喫

べずして猶豫居ぞと曰はするに冷泉帶刀衆に抽て臣等が輜餉はまだ來候はずと稟あぐ殿聞し召れてそはさぞ迷惑たるべしと即近臣に命せつけられ臨時御豫慮に準備せさせたまひける佩兵糧どもを夥しく運び出させられて人々に頒與へ給ひける人々感激と謝稟あげていと珍らしくも粗食をなん喫べける因にいふ後來ある卯月の初つかた櫻川の水上環翠が潭といへる所に漁を催させたまふ這櫻川の濫觴は山口の北畔なる曙山彌勒が嶽望高麗山より落合て巨浸をなし外廓の左側を流るゝ大河なり比先はこの川年々洪水溢れ兩岸の堤ども那邊這方決て沿河の隴畝を壊けるゆゑこれに纏へる村落は歿を被ること不小可かれば河砂は左右の隴畝より高きと幾丈餘におよべりしかあるに駒澤次郎左衛門の両功の役を蒙りしにまづ源なる彌勒ヶ嶽の赤禿に雜木植また曙山望高麗山の伐疎たる間にも萬千

の樹を植副以後で袖父樵者の入ことを堅禁せしかば那の諸山年を経て鬱葱と繁くたち置ぬこれがために三伏の日は雲氣凝濕りて時となく白雨を降しけるゆゑそれよりは更に早損の患あることなかりき又源脈より土砂のくずれながることあらねば大雨後水の激勢に從て自然河底壅通て當初のごとく底深くなりけり或は駒澤に問て曰く足下の治河せられしより修堤いち早く成きたるのみならず二回決壊ことなきは比類なき手段なりと深く感服たるに駒澤道やう在下とて別に奇き策も侍らず唯その各處の父老どもの才勘ある者を簡それがいふに任て令をなし侍りしなり父老どもが告には明日の公役は馬踏を修らふ土力作なれば人夫は何の村に充させたまへといふ又その明日は根廻りを堅むる力作なれば某地へ出夫を觸させ給へといふにそれ等が指せる處の民を役使ば極めて成事はべるよ士をほるには耕耘るに

熟せるものを夫にとり石材木など搬運には山手の石などに馴たるものを使に空作を倣さぬゆゑに若ありけんと對へられささても大内介殿は環翠が潭に赴かせたまふ舟行は潮洄て迂遠ば例の御馬に召れてはやその地方に臻り見たまふに那の環翠が潭といふは大きやかなる猪にて雄手雌手の翠壁は宛も削り成がごとく緑樹は彌が上にたちこめそれが間々白鷺踴映山紅の類爛珊て美じう趣ありて詩に描ともあよばじ恠の巖の彎曲には紫の幕絞せたる大座船を繋ぎてありけるは御還の支度なりける那里に岡あり方二丁ばかりの芝生なり今日は日もよく晴て松ふく風いとすゞしこの時夥の漁戸どもは嫩鱒の群來りて瀑の段を登るところを小柄網もて奥より流れ出る殘花と共に汲ひあぐる手業の好光景くまた潭底より大偉き鯉魚を左右に掖ばさみて游あがるもありていと興ふかし殿は芝生に五色の花籃を敷せて銀

の茶行厨 描金の携盒ども光輝奪目に水陸の珍味を
悉さしめられ玉觥に盛る美酒は琥珀の色をなん欺
ける酒酣に耳熱り大内介殿尊意和暢はしく

夕日さす河邊の松の下つし

ときはかきははに花さかりなり

と口號みたまひければ群臣もまた隨意に詩を賦歌を
詠るは御興をそへ奉るにぞありける殿は廣座を流
盼たまひ汝等もけふは川道遙の伴なひなれば定て趣
ある佳肴ども携來ぬらん些憚からずしてこれへ出
せ見まほしさと仰するに人々は去ぬる射獵のとき
に懲せしゆえ今日はぬかるまじと大家相約るが如く
佩行厨にて來りけるが今の殿旨を承て個々面を看あ
はせ半响頓口無言で慚愧ね殿は長臣どもが所爲を御
覽たまひて笑容可掬玉ひしとぞ人々はこのとき殿
の什麼とも詰たまふ御舉動はなけれど漸内省りて實
是今日は寛たる川漁の御遊なるに趣向せる下物さ

へ準備せず 剩軍役かあるは猪狩に出る如く突兀く
打扮たるこそ悔しけれ今よりは兎に角に時宜の緩急
に用心へきことなりとておのれと羞想て殿の温和な
る御徳に化せられけるとなん是はこれ後話なれど
も筆の序に記せしものなりかく閑話に絆はりて原柄
を説晚つさても大内介殿は旗下を將て猛虎嶺に狩入
たまふに壯俊ども前を争ひて馳躡る殿は萬般駒澤が
指揮のごとく節制ありて前日の未牌に下令せ給ふ
に此日の味早には列卒に指れたる界隈の里民ばら
跑聚峰々谷々より鼓うち躡時々関をつくりなどし
て驅逐ちきしゆえ扈從の侍は器械をもて野猪兎
鹿猿の類を射斃刺斃各勇奮を顯はしける殿は機會
を見てつと山を馳下りとある小堆き阜に馬を立られ
今朝御出馬の時と齊しく那の日輪の金扇を眞甲に懸
し給へば落かたなる斜照にいみじう耀たり那處這
處に散在るたる麾下の衆これを見て瞬くうちに馳聚

御馬を八重に簇擁みて眞黒に備たるは鐵桶よりも堅
かたかるべし初殿の軍配扇を御額に支たまひて假意
士卒に異風に想せられしは一時の機變といふものに
て今班軍に臨み令使を待ずして胴勢を頓に集め給は
んとこの御試なりかし殿はそれより山口指して歸せた
まふに御後隊の大身衆 陸續相退一隊一隊づゝ初の
やうに聊か次叙を亂さずいよゝ殿かに見ゆさても
そのうち木綿屋徳兵衛は一清軒が教に任せ片時も早
く山口へ赴て叫屈ばやと此日家を出て出村迄來け
るが這里の茶店の店小二とは親しき友垣なれば立よ
りて寒温を叙しうへ兄伽羅羅院を伴ゆきたる者の容
貌を精く問けるにこの時しも御還の行列拜んと這
の邊の農民ども夥しく集合來りぬ店小二も人に誘
はれて出ゆく徳兵衛はかゝることに心染ねば不恰好
歹に跟に隨て村口までいたり見るはや堤の左右に
は看人蟻の如くに附て尻坐居たり徳兵衛は家郷に

纏らひて今日の御狩の巷説も臆臆なれば飄然今かく
出てかけたるに官道は遮行人にて車駕果まては往來
かなはずとなん聞ゆれば只得人叢中に在りて熟視居
たるに早御胴勢も過完て迥の後に後押の一隊のみ
と見えしかば群聚の者は四分五落到散さりぬ事有湊
巧萩野祐仙も今日の扈從の後し在けるが行次遅て漸
只今この處を經過かゝるを彷徨居たる徳兵衛が後背
より徳兵衛あれこそ前日令兄を伴ゆきたる人なりと指
教ゆ徳兵衛は聞より血眼になりて走りかゝり矢庭に
祐仙が腕を捉へ和主は前に家兄の伽羅羅院を伴行
れしか什麼等の幹にて家兄は何處に居侍るや早く在
處を謂れよと嘆たるにぞ祐仙は喫一驚せしが不知狀
に假作働は何奴なれば余に向て傷觸を做すぞ我聊
さる記得なし誤認か但は風魔なるかと力を極めて推
跳すに徳兵衛はむしやぶりつきて放やらす千渡賊萬
騙局めと罵合て互に舌戰最中なるが山岡玄蕃允馬

を驅めて押來この光景を看咎め又徳兵衛が罵る語を聞きよりこは身の上の大事發れりと即家卒を喝しそな痴蒼の破隊たる無狀漢駛く細れと令すれば跟隨ども重壓て倏ち徳兵衛を捕て押へ高小手に細あげ猿轡をさへはめさせ己が胸勢にとり籠て牽せゆく茶店主人はこの頭勢を看より肝を消し連累ては離離と足をも空に逃たりけり

第十九回〔后虫〕

秋の夕のたゞ暝に暮て山岡玄蕃允はやうやく己が邸に回直に徳兵衛を内庭に牽出させ呀祐仙其奴が懐裏を檢見よと道祐仙波と應て徳兵衛が懐裡を抓探るに果して一通の文書のありけるを奪將て山岡へ呈ぐれば玄蕃允披き閱て原來々々こは修験めが屈死せる疑獄の訴狀なり恰好も湊巧たるは吾高連の做ところなり匹夫め活置ては後日の妨いで一刀に截斷

くれんと大の眼を忿かし驚破佩刀を脱んとす阿呀雲時待給へ那下薦め大官人直に御手を卸れんは勿躰なし小的が所置に任せ給へと聲をかけて襖を披出来るは別人ならず日外半を破りて逐電したる豹藤内にて蚤よりこの邸に舍匿居たるなりこの時豹藤内はありあふ鞭を把もあへず徳兵衛が背より臂にかけて策徳兵衛は其儘阿と叫びて俯に仆るを連々疊々て隆々とひた打に打ば鮮血滾々と九竅より進り出憐むべし一點無罪の良民かく山岡が非道の爲に一朝草葉の露とぞ消にける豹藤内うち密語この屍の捨やう如々せばよかめりと議に玄蕃允うち點頭藤内做得汝よきに計へと道に潜處影の了頭ども慌忙出來相公早く内房へ入せ給へ今日なん和子君に物怪の附て侍ると喘吁く玄蕃允大に駭き直に帳内を望み一烟走に跑入ぬこれは先さておきて駒澤次郎左衛門春雄は不料災難にて御不審を蒙ふり當分冷泉帶刀に預けられ

しかばいたく慎み只閉籠てぞありける伊人生得天の縦る英才なれば策を帷幄の中に運らし勝ことを千里外に決すといふ如く今かく閑居に在ながら只願治國の爲にほと／＼肺腑を膈まし夜毎に仰て乾象を窺けるが今宵も獵より回來る東主帶刀と共に露臺に上りてや／＼天文を觀了りて阿呀兇星已に光鎧を失へり國敵はや運數盡たり御家安泰の表喜ばしやといふ帶刀いへらくしかあらば何等の事ありてか國敵速に亡なんといひも果ざるに駒澤外面を下見しては怪し一道の怨氣北よりして南す城外に屈死の者やあらんずらん帶刀殿いそぎ查あれと道に帶刀は心を得て即下たち若黨等に後門を開かせ竊に回看ともいと冥暗き深巷時已に樵樓の三鼓を報て交加弗に人斷たり時ばかりありて煞沙と聲轉して四五個の走卒等怪の紋つけたる提燈を先だて一摺の吊臺を昇來帶刀が後門を行過るを帶刀やをら喚止若黨ばらに令して油

簞を扯除させ燭を照してよく視ればまだ嫩やかなる蕪菁菜蕪がちに種々の菜蔬を堆く盛てぞありける帶刀は躑居走卒どもを屹と睨み奴輩は誰が内の者なるぞなどてかく夜陰におよび何所へ這の菜蔬を拿ゆくぞと詢問れて走卒等戰さ／＼吾們は山岡が下從に候が今日不料和子に鬼注が附て侍るゆゑ家公より上の庄の天寧寺へ大般若の祈禱を托み申され大衆へ明早の饗膳の聽用やうにと夜深ながら菜蔬を饑申さるにて候と陳じけるに帶刀更に信然とせず直に手の者を令して那の走卒等を圍住吊臺をば裏頭へ昇入させ即時菜蔬を除去させて檢査見に果して一個の死屍を露出たる走卒等は瞠目頓口て面色乍土の如し帶刀は眼を忿かし汝等は殺人の同類なまども科を赦して助け回すほどに辱く想ひその屍をさし閣回れ汝が主はさらなり誰にもあれ尙この事を塵ばかりも失口においては早速拘到縛首を斬しむべしと

嚇されて走卒等は大家歹低々々と寒戦出し、咬、牙各地に俯伏て合爪ふかく怒命の恩を謝し強て脱たる腰を伸就々臺を荷去ぬ駒澤次郎左衛門出来屍を撿ためこは鞭創とほほしく肥肉に紫青色の痕印たれども總て致命處をはづれたりなを治すべきは檀中に微々一縷の生氣残りりとやをら熱き手巾の類にて遍身を蒸し温めさせ木乃伊を許多飲しむれば時ばかりありて死者は吻と息噴廻し兎角してや、言ほどになりけるこれは甲夜に豹藤内に誦殺されたる木綿屋徳兵衛なり次郎左衛門その口歎を開糺熟々帯刀と謀て火速野祐仙を拘到來らせ直に拷問に掛しかば祐仙は責苦に忍かねて山岡玄蕃が岩代瀑布太を荷擔逆を企てしより豹藤内とて顔、膈畧もある波臣を扶持萬の參謀とし種々の陰匿を計較たる一五十一をもちもなく吐露せりさてまた今日しも山岡が一子千鶴丸に邪魅の附たる所以を何如にと尋るに家公の

留主に徒然を感んと梅香了豎輩は僅々八歳の千鶴丸を傳て看樓の格子より通衢の往來を下視し何くれと啼々ていと喧し日もちりくの入かたに一個の弄蛇乞兒が經過かゝり例のやうに格子の下に在て百般と蛇を弄使て饒舌けるに侍女どもはいと興がりて餘念なくいつか籠子をさへ過半捲かけたるに和子は乳媪が膝に尻かけて在すを弄蛇乞兒はこれを見るより何やらん念々有聲て己が傾なる蛇をほどけば這の蛇兎々と閃々て看樓の裏に飛入ける侍女共は呀と叫びて忙惑へるその間に那曲者は何處へか往けんかいくれ見えずぞなりける千鶴丸はこれに驚れて發急驚風られ大熱灼が如くなれば抱傳乳媪は安からずおもひ忙はしく内房へ抱き行て種々に勦まらすれば侍女どもは醫師と禰師よとたゞ騒ぎに騒ぎ總て人心地もなし悪にも強く愛にも強き山岡殿歸端これを聞韋駄天の如く内房に跑入て母なき愛子は一入可愛さ

もいやまさり千鶴丸が病床に襯き肚腹など撫摩つ見であるにこはいかにいと腥き蛇の鎌首立て山岡を睨みたるが紅の舌をへらくと出し幾尋ともなく稚の腹を卷きたるはいと可惡また凍ましげなりさしもの山岡も呆果て只是彫の驗者を聚めて多方秘法を做さしむれども何の効もあらで稚は倍煩悶しめる光景なれば玄蕃允は茫然として困みきつてぞ在しけるかくて看顧に來たる同紋衆の勅に任せて名たる佐伯一清軒を招かしむ玄蕃は東道支度して待に一清軒詰且參りてその托を允ひ聽て封を起すに又山風靈を得たり一清や、霎時思惟さていふやうこは山風靈といへる卦にて三毒盤の上にて相食の兆なり三毒とは蝸牛蟻、蛇の三毒なりしかるに今變爻によりて味はひ侍るに大毒已に中毒小毒を併食して只一毒となり妖氣最深、重唐土にてはこれを金蠶蠱毒といふ世の所謂大神これなりさればこの邪祟中々尋常

の加持祈禱の禳へうもあらず拙老も平常の蠱毒は頃日も泰山府君の法を修して禳除たれど公子の思たまふ兎注は一方ならぬ大毒なれば拙が淺術の及所に侍らずといふ山岡はなを感慙に禳除の法を需て止ざりければ一清や、沉思せしが有有卦象に蛇龜に因ひの意ありさあれば玄武神聖の靈威にて容易この邪祟を除くべしその法は從來顯聖ある靈符の尊像を設けて皿に一頭の龜を貯へ妙見大菩薩の大醮を修ひ給はゞ蠱毒立所に退散すべし、必しも疑あるべからず倘又二十四時を過されなばいさゝかその詮なかるべしと最鐵口もいひ放ぬ山岡が逆意の事も歴然と封面に見えたれども深く忌諱を避聊かも其色をも顯さざりしとかや玄蕃允秀門は一清軒が明斷に服し聞しに優る國手かなと厚く賞して回しける時しも生憎と御館より急の御召ありけるにぞ玄蕃允はほとく窘迫たれども殿命辭がたく只得登城せんと出かゝり



豹藤内を機密房に呼よせていふやう賤息が積法は時刻の期あれば汝に一大事を托おくなりそは如くせよと私語をはり陪従を將て出ゆきけりこれはこれ山岡が豹藤内を己が腹心と援思へる故なりけり玄蕃允秀門は早御館に候て例の席に着にはや長臣等は起光來りて詰居たり時ばかりありて駒澤次郎左衛門何の間に縦禁ありしか麻神の變積整々温々うち上て正面に座を占さていふやう小臣不肖なれども今日事の裁判なすべき釣旨を蒙りたれば高座御免と式代せり冷泉帶刀やをら令を傳訴人木綿屋徳兵衛犯人荻野祐仙を書院の白洲へ拽出さしむ山岡玄蕃允閃と看より駭き得て面土色の如く岩代瀑布太と眼を相看せ各懐鬼胎逡巡せり駒澤次郎左衛門威儀を正し各慎て奉承昨夜まづ斯々の事あり木綿屋徳兵衛蘇生して審に申出し故早速祐仙を拘到痛拷問にかけし所叛逆の張本山岡玄蕃允岩代瀑布太を合夥君を幽籠奉

り己が子千鶴丸を儲君とし大内家の社稷を奪んと謀り又小臣をも黜んと祐仙に命金子もて徳兵衛が兄修驗伽羅羅院が命を買得小臣へ冤の難題を聲言且渠に自害せしめて小臣が雪冤の滅口をさせたることも逐一白狀して玄蕃允瀑布太が罪科已にかく顯然たるは天網恢恢疎にして漏さずとは此事ならんと叙にける玄蕃允これを聞て呵々と笑ひ修驗がことは姑息我を叛逆などとは何等の讒語なるぞといひも果ぬに瀑布太も忪ず居丈高になりて小生をも謀反の荷擔人とは旁痛しそは何ぞ歴然たる證據の侍るや和殿こそ眞の叛逆人なれ靈符の一軸を豹藤内に盜取せたる事は渠が白狀明白たるに上意呼はり心得ずと忿を發して嘲けれども次郎左衛門は見向もやらず何呀祥一は何處に在早く來れと高やかに叫びければ掖房より波と應て豹藤内とは方便の假名實は駒澤了庵が賤息祥一山岡殿へ見參せんと呼はりつゝ立派に打扮

右の手に三方を拿左手は千鶴丸の手を携て悠々と座に即ば山岡見より原來豹藤内奴は駒澤が間牒にて在つるか謀得つと想しに謀られたること朽惜けれと天を仰て長嘆しかの三方は我に賜劔自盡との結構なるかと熟視は短刀にはあらずして龜を纏へる蛇を載てありぬ祥一かさねて自家弱冠にて父了庵が勸當をうけ本藩を亡命甲賀山に隠れ居て忍術を修行せしに其頭痘を病て面容變人に認められぬを幸と義兄次郎左衛門密に呼下し父に代りて勘氣を許され鶴に靈像の失たる當時貴殿の手より修驗を捕られ次郎左衛門謀叛せりと冤を云かけたるをりから計に就て計を行なふは孫吳が秘奧なりとて兄次郎左衛門より奇計の指揮を受間牒となりて貴殿方へ入込駒澤を罪せんには修驗一個にては放心不下と貴殿に一計を進め寶藏に躲入曲意捕はれてしかせしなり從來那の一軸は貴殿竊に匿置れしとは四相を悟る次郎左衛門疾よ

りこれを察昨日弄蛇乞兒をして千鶴丸へ金蠶蠱毒を施させたるに貴殿また一清軒が易斷を信じ自家に一大事を發し靈符の尊像を遞されたるゆる小的即醜禮を做して頼に稚の鬼注を禳驅正實と落掌一軸は次郎左衛門が指揮により千鶴丸の回忠の手土産とし適間釣座に呈上たりといひ演けるにぞ玄蕃允今は一語の抵牾ごとなく忽地に罪に伏し且駒澤が寛厚なる所置を善し猛き心も自然と融け次郎左衛門にうち對ひかく發覺うへは是非に及ばずいて殺身せんと肩衣刎れば瀑布太も共肌甘げ已に自害と見えたりけり次郎左衛門忙これを止め貴處は舊これ公族大夫君寛仁に在せば血で血を洗事は做させられじ就公裁を待めされよ私に切腹して御殿を汚されんはいよく罪を累ぬる道理また瀑布太主も死を止まり過を改られこれより無二の忠勤あれ足下程の才幹を公忠に施れなば實是國事に任なん功を以て罪を償なふ例も

あり曲て小臣が諫に從れよと多方演説に君侯は適間より御上段の隔簾よりこの光景を透窺あらせられしがやをら此時次郎左衛門をちかく召れ次郎左衛門山岡が家祿は千鶴丸へ申しつくるぞ鴻臚は隠居させよその餘は汝が可自由裁に所置といひすて入せ給へば次郎左衛門波々と俯伏てうち慥領ぬ

第二十回 (壽)

されば駒澤次郎左衛門は殿の鈎旨にまかせ岩代瀑布大が死罪を赦し己が屬吏と做して海田開發の惣司たらしむ瀑布太は殿の御惠を辱なく想ひ又駒澤が恩をして仇に酬たる好意を好し乍邪心を翻し惡に強ければ善にも強といふごとくいち早く忠功を建て舊惡を償さんと種々工夫を凝し苦勞を厭はず努力さて夫を使こと度をはづさず寛やかに物して速かに成駒澤が指畫のごとく多年ならずして遂に幾千町の

映田をぞ聞きける但這の新田の堤防は夥の岡を設けたれば旱天には岡を閉雨濕には岡を開て落潮漲を落しける故聊も水旱の損なく萬々歳の寶地を成けるとかや駒澤は舊新田を闢ことは古田荒るとて好ざれども這の斥田の新法は又十全の國益を查勘出して開せたるよしなりかくて駒澤が執成にて木綿屋徳兵衛は孝行奇特者なりと褒させられ御城下に於て販布賣買の惣問屋に仰せつけられければ年を経て財累巨萬今こそ老母を安樂にぞ養ける徳兵衛又貴財を費して一字の梵刹を營みしは兄伽羅羅院が菩提を吊らふためにせしとぞさてまた萩野祐仙も駒澤が胸襟にて死刑一等を宥られ深山へおしこめ置生涯山を出ることを許されず駒澤また橋雞庵が一功を賞し名を難作と更めさせ一株の夫頭となし兼て新田の出夫世話をも與らしめぬかゝりし後は國泰に民安く雨調風順年々五穀豐登て途遺たるを拾はず巷夜局

ず明君の徳化の然らしむることはいひながら分國はさらにて與國までもこれに化せられ風俗移易て民みな淳朴になりまさりて當初の人肉經紀などは跡なくなりぬ大内介殿は群一が今般の勳功を賞せられ新知五百石を賜はり騎士列にぞ做されける又次郎左衛門をば常路職に登庸たまひけりこれは帶刀が推舉にて己に代しめたるなり帶刀もまた忠實の武人なりかし加旃す帶刀が好意にて兼て聞知れる秋月氏との良縁を玉成せんと筑前薩陵へ話談けるに弓之助も當時は加官進祿して大宰家の國老となり居たるがこの好音を悅 渾家水青女兒深雪にこのよし面語せて帶刀が媒約に従せ日を下みて粧色など美を盡ししかるべき家長を傳て深雪を山口なる烏衣巷へ送り差しけりさてまた深雪は淺香を腰とし乳母眞紫をも傳かせて今宵なん郎君の邸へ入興をなしける駒澤次郎左衛門春雄は花燭形のごとく物してめてたく合香了へ

ける春雄はこれまでも新人は全然失明とのみ想ひ居たるが洞房に入來渠が帽子を脱たるを看るに這はにかに深雪は銀海は瑩るまでその光澤秋水のごとくなれば比先宇治明石にて見しよりはこゝろからにや百倍も近優して雪膚花貌天然の艶色貴に媚て宛も毛嬌西施を欺くばかりなり春雄は喜出望外いと心ときめきて又しも洞房の觴を相斟相酌深雪は今宵の團圓を嬉しみあるは來方の艱苦しこといもをかたりいづ春雄は府中の驛門にて深雪が零落し形状を見て只顧痛はしく想ひくらしそれより後の事を一切しらねば案に相違して今深雪が容易旨の明たるを訝かりそのゆゑを詢り問るゝに深雪回答ていへるやう郎嚮に冤の難に遇たまひしと聞身も世もあられず土地皆聖廟を禱とて朝々冷けき水にて垢離を搔侍りしに自然血逆も下降しかいと心地さはやぎかけまくも御神の垂にて某の日偶と日月ともに明侍りき春雄



これを聞より指を屈て日を算ゆれば恰ど己が宛の白
 たる日にぞありける春雄は今に始ぬ神靈の灼然なる
 ことを渴仰せりかく恩々愛々語らふうちに斗轉星移
 ば眞柴淺香は翠帳を卸して避出るに兩個の夫妻鴛
 鴦の衾をうち襲ね戀を轉し鳳を倒し汝貪吾愛と綱纏
 つゝ瓦に巫山の夢路をぞ歩りけるかくて深雪は室津
 なる亡八のお六が庇を忘れず熟く夫主と議一介の使
 を差して登時の身價の十倍なる金子をば吉兵衛へ與
 せ又數の絹帛をお六へ贈りてその謝意を表しけり深
 雪また己が套房金を出し人を央て赤馬が關なる遊女
 小支那が身を價はしめ常に來去る雜作とは倚情ある
 よしを知り居れば渠に妻せつ後來深雪は男女の兒
 を夥産けたるにぞ次男某をば岳父之助請養て己
 が箕裘を襲しめぬ一年鎌倉殿より駒澤が經濟の大才
 あることを聞召およばせられ御昵近に擢用はるべき
 との御教書到來せしかば大内介滿興朝臣大命を謹承

給ひ即日次郎左衛門を召て御誼の趣を鈞命たまへ
 ば次郎左衛門感激奉承を稟あげ舊主に眷戀は盡せぬ
 ども只得秩祿を奉辭御暇を願ければ滿興朝臣御鈞諾
 あらせられて渠が知行三千石を同家祥一郎に賜
 の持高併て三千五百石とし騎隊長にぞ命られける
 これ乃駒澤が功勞を報せらる故なりけりこれより
 次郎左衛門は舊姓に復し宮城次郎左衛門春雄と名告
 家眷を携して遙々鎌倉指てぞ起程ける奶々深雪は故
 に大津の驛に舍て父老土人どもを呼出し夥の資財を
 頼興へて渠等が舊誼を謝し又海道一路の處々にて些
 の看顧になりたる者どもにも有差に物を取せ一飯の
 徳をだに酬いざるはなかけりり不日鎌倉に到て參上
 せるよし聞あげしかば程なく召出されて拜謁をなし
 けるに君は速にまゐり満足せりとの大命あらせた
 まひて即座に五千石餘の采地を賜はり左衛門少尉に
 ぞ做されけるが春雄は是より宮城新左衛門尉と稱し

親軍侍衛となりすませしは當初本國菊池を退身たる
 時の舊志を遂たるなりけり金吾春雄が葦葦下にて
 忠勤功勞を悉せし勳蹟は更に秃筆に記すべうもなけ
 れば止ぬ爾後春雄沈思に功成名遂て身退は天の
 道なりと一通の表を呈げ強て乞骸骨奉りけるに
 しゆびよく歸老を許させ給ひければ春雄深く君恩を
 叩謝がり即日妻深雪を將て故郷なる筑紫湯へぞ起
 程ける嫡子春盈恩命を蒙り父が家督を繼て御扈從
 に左右その餘の男兒女子も總て肉食者に脩身たる
 故今遠行に臨み些の遺憾もあらざりけりかくて春
 雄夫婦は肥後の境に入けれども今の國守も菊池典廩
 と稱し故頭殿の御曹子なりけるが鎌府に參勤せられ
 て在府あらるゝ時に己が門弟とせる因あつければ己
 が下向を聞せられれば極てその款待あらんことを憚

り異様に假扮して經歷遂に阿蘇の御嶽に登り得て浮
 世の人の尊ね來まじき幽僻なる風水を卜て亂雲堆裏
 に茅廬を結び丘壑を愛し猿鶴を侶とし爰に天年を養
 てその竟る處をしらず詩あり證とす
 當三復入州寛三作期一人間踏地有不安危
 風流三丘壑三眞吾事三籌策三廟堂三非所知
 白水春波天濤々蒼峰晴雪錦離々
 恰逢三居士身輕日一正是山中多景時
 後來ある山賤が山又山に伐入たるに邂逅認しはその
 人にやあらん大抵百歳を超つべき態にて世の散樂に
 演ずなる高砂の尉姥のやうにて仙風道骨を具て顔色
 なを光滑しき夫婦の老人に値遇さし語りたるもいと
 芽出たき例にぞありける

朝顔日記 大尾

明治四十四年七月十五日印刷
明治四十四年七月十五日發行

朝顔日記

東京市京橋區南傳馬町二丁目

發行所 葵文會

代表者

林縫之助

著作權所有

東京市京橋區南傳馬町二丁目十二番地

印刷所 吉川弘文館

代表者 吉川半七

東京市神田區三河町三丁目四番地

印刷所 武木印刷所

發行所 吉川弘文館

合資會社

電話東京六九七番

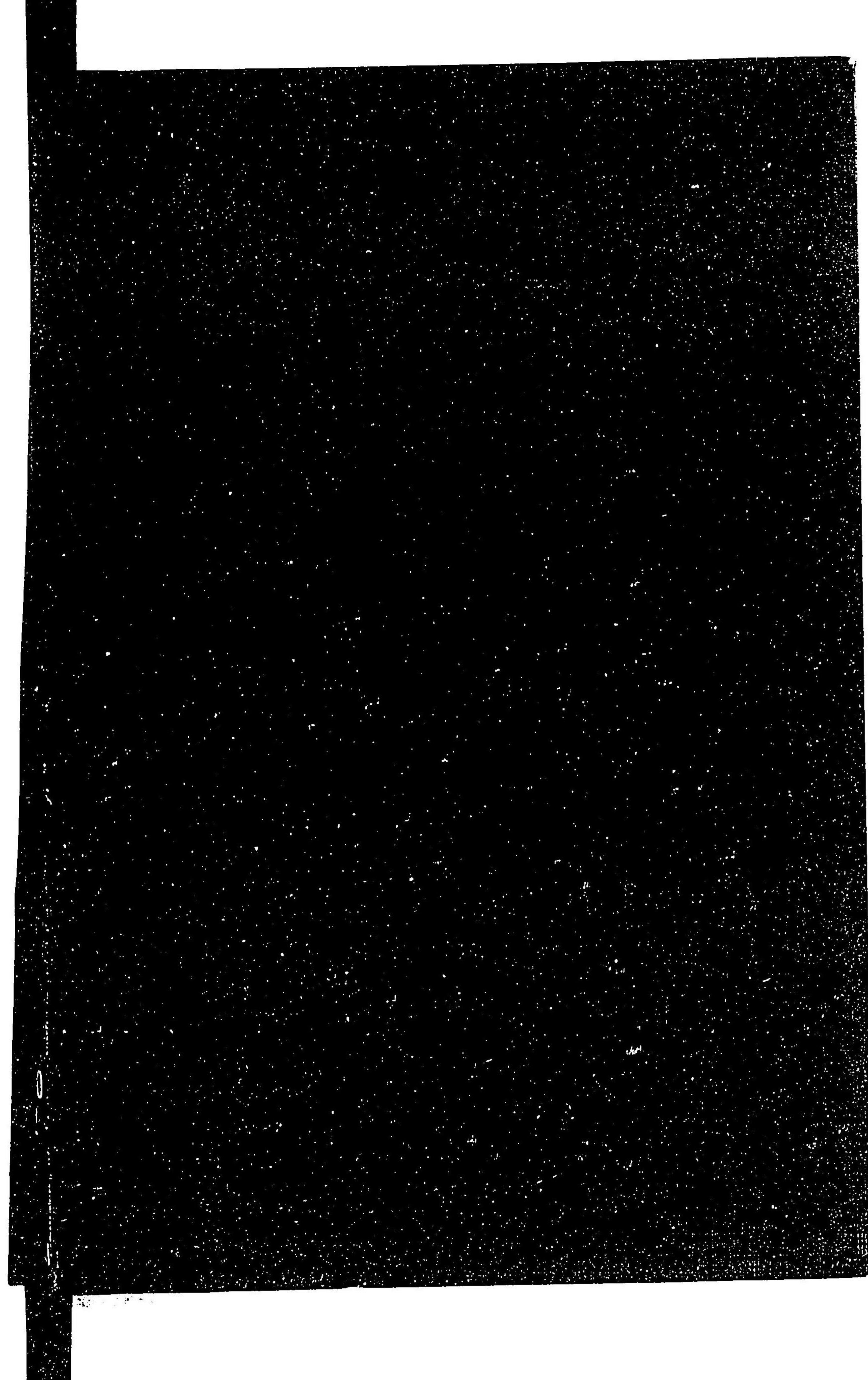
正價金七拾錢
郵稅金拾錢
振替東京金庫四四番

英文庫既刊及近刊書

(英文庫本は皆輸入にして
定價は各册共一定金七拾錢)

修紫田舎源氏 一	東海道名所圖會 上	修紫田舎源氏 二	東海道名所圖會 下	繪本西遊記 一	椿説弓張月 一
發賣 禁止	刊既	發賣 禁止	結完	刊既	刊既
繪本西遊記 二	椿説弓張月 二	都名所圖會 一	繪本西遊記 三	椿説弓張月 三	都名所圖會 二
刊既	刊既	刊既	結完	刊既	刊既
東海道膝栗毛 上	椿説弓張月 四	朝顔日記 全	東海道膝栗毛 下	山海名産圖會 全	稻妻表紙 全
刊近	結完	刊近	近刊 完結	刊近	刊近

330
12



330
12

089079-000-9

330-12

朝顏日記

雨香園 柳浪/著

M44

DBM-0016



36.11.17,